

山梨県南アルプス市  
Terabe Muratsuki dai6 (III)

## 寺部村附第6遺跡 第III地点

---

市道若草1級1号線道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

---

2005. 3

南アルプス市教育委員会  
南アルプス市建設部



## 例　　言

- 1 本書は山梨県南アルプス市寺部地内に所在する「寺部村附第6遺跡 第Ⅲ地点」の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は南アルプス市道若草1級1号線道路改良事業に伴なって実施した。
- 3 発掘調査は平成16年6月22日から平成16年8月6日にかけて行ない、実質調査日数は32.0日であった。
- 4 「寺部村附第6遺跡」は、新山梨環状道路建設に伴い平成12年度から15年度にかけて既に2地点で発掘調査が実施されているため（南アルプス市埋蔵文化財発掘調査報告書第2集（2004）及び同第5集（2005））、今回本書で報告する調査地点を「第Ⅲ地点」と呼称することとした。
- 5 調査範囲は、平成16年3月10日から11日にかけて実施した試掘調査に基づき、実質掘削面積は、275.6m<sup>2</sup>であった。
- 6 発掘調査は南アルプス市建設部の委託を受けて南アルプス市教育委員会が主体となって行い、田中大輔（南アルプス市教育委員会生涯学習課文化財担当）が担当した。
- 7 発掘調査に従事したのは以下の方々である。（敬称略・50音順）  
飯室めぐみ 今村貞雄 真道みゆき 山路宏美 山本愛 山本三重子（一般）  
杉本祐太 飯田卓弥（白根高校インターナンシップ[職場体験]）
- 8 本書の編集・執筆は田中が行った。
- 9 整理作業は、平成16年度に、平成15年度に調査を実施した同遺跡第Ⅱ地点と一括して行い、飯室・真道・山路・山本（愛）・山本（三）が参加した。
- 10 本書に掲載した地図は、国土地理院発行1/50000「甲府」「鍛沢」、若草町役場発行1/10000「若草町全図」及び若草町役場発行「都市計画図」1/2500である。
- 11 発掘調査・整理作業に際しては、以下の諸氏・諸機関にご教示、ご協力を賜った。記して謝意を表する次第である。  
櫛原功一 佐々木満 宮澤公雄 山梨県埋蔵文化財センター（敬称略・50音順）
- 12 本書に関わる出土遺物並びに写真・記録図面類は南アルプス市教育委員会において保管している。

## 凡　　例

### 遺構凡例

- 1 遺構の縮尺は、調査区全体測量図1/250、竪穴住居址1/40、溝平面図1/80、溝断面図1/40、土坑1/80とした。平面図に対し、断面図の縮尺が2倍になっているものがあるので留意されたい。
- 2 遺構記載における計測値の単位はmに統一した。
- 3 遺構断面図中の「267.0」等の数値は標高を表し、単位はメートルである。また同一遺構挿図中の水系レベルは統一した。

- 4 挿図中の北方位はすべて国家座標に基づく座標北である。磁北は $6^{\circ} 10'$  西偏する。
- 5 遺構断面図において、基本土層はスクリーントーンで示したが、煩雑になる場合は省略した。これ以外に用いたスクリーントーン、ドットマークの凡例は、各々使用された挿図中に示した。
- 6 本書においては、便宜上遺構名称に以下に示すような略称を用いた。分類基準は以下のとおり。
  - S I 竪穴住居址
  - S D 溝
  - P ピット（竪穴住居址等の遺構に伴う坑）
  - S K 土 坑（土に穿たれた穴で上記以外のもの）
- 7 遺構の番号は、発掘調査時点においては遺構種別ごとに確認順に付した。そのため、その所属時期、位置とは無関係である。ただし、整理作業において、近接した同遺跡第II地点で検出された遺構との比較検討上の必要性から、両地点（第II・第III地点）で検出された遺構については、共通の番号を持たせる便宜上、本報告書においては第1章第2節（3）に示したとおり調査時の遺構番号を変更した。このような事情により、本報告書においては、遺構番号SK01・02、SD04・05については欠番となっている。なお、本報告書でこのような遺構番号の整理を行った場合でも、遺物の注記、実測を含め、本書執筆、図版のトレース直前まで調査時の遺構番号で作業を行っている。

#### 遺物凡例

- 1 注記における遺構略称は「村6Ⅲ」とした。
- 2 遺物の縮尺は土器 $1/3$ で示した。
- 3 土器等回転体に近い遺物の実測に際しては四分割法を用い、遺物の右前半 $1/4$ を切り取った状態で作図し、左側 $1/2$ に外面、右側 $1/2$ に断面及び内面を記録した。また、残存状況によっては遺物の中心を算出し、 $180^{\circ}$ 回転して作図したが、この場合は中心線を一点鎖線で示した。また断面等を任意の回転で付した場合は点線で示した。
- 4 回転体にならない遺物の実測に際しては三角投影法に準拠した図を示した。また、破片資料であるため推定径の算出不能な土器、及び拓影図に関しても同様の作図に依った。
- 5 本文記載及び遺物観察表における遺物の計測値の単位はcmに統一した。
- 6 遺物観察表において括弧で示した計測値は、推定値若しくは残存最大高である。
- 7 遺物の色調については、農林水産省農林水産技術会議事務局監修 財団法人日本色彩研究所色票監修『新版 標準土色帳』に準拠して付与した。
- 8 挿図中の遺物番号と写真図版、遺物観察表中の遺物番号は一致する。

# 目 次

例 言  
凡 例  
目 次

第Ⅰ章 調査に至る経緯と経過	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の方法と経過	1
第Ⅱ章 遺跡の立地と環境	7
第1節 遺跡の立地	7
第2節 調査区の土層	9
第Ⅲ章 検出された遺構と遺物	10
第1節 竪穴住居址 (S I)	10
第2節 溝 (S D)	10
第3節 土坑 (S K)	16
第Ⅳ章 総括	18

参考引用文献  
図 版  
報告書抄録  
奥 付

## 挿図目次

第1図 遺跡の位置	2
第2図 調査区の位置と配置	5
第3図 調査区全体測量図	6
第4図 遺跡の立地と周辺の調査	8
第5図 調査区の土層	9
第6図 S I O 1 測量図及び出土遺物	11
第7図 溝・土坑断面図	12
第8図 溝・土坑平面図	13
第9図 溝出土遺物	15

## 表目次

第1表 遺構名称新旧対照表	4
第2表 S I O 1 ピット計測表	11
第3表 出土遺物観察表	16
第4表 土坑計測表	17

## 図版目次

図版1 調査区全景（南より）	
図版2 調査区全景	
図版3 S I O 1（南より）／S D O 1（東より）	
図版4 S D O 2（南より）／S D O 3（東より）	
図版5 S I O 1出土遺物（1）／S I O 1出土遺物（2）／S D O 1出土遺物	

# 第Ⅰ章 調査に至る経緯と経過

## 第1節 調査に至る経緯

平成15年6月、南アルプス市教育委員会(以下市教委)は、南アルプス市建設部建設課(以下市建設課)より、南アルプス市寺部地内において市道若草1級1号線を建設するに際し、当該計画地における埋蔵文化財の有無について照会を受けた。

市教委は、当該計画地が周知の埋蔵文化財包蔵地内であるので文化財保護法に基づく通知が必要な旨回答した。そこで市建設課は平成16年1月8日、文化財保護法第57条の3に基づく通知を市教委に提出し、市教委は山梨県教育委員会(以下県教委)にこれを進達した。

これを受けて平成16年3月5日には、県教育長より南アルプス市に対して着工に際しては試掘調査をする旨通知があった。

これを受けて市建設課は、市教委に試掘調査を依頼し、市教委は平成16年3月10日～11日に文化財保護法第57条の4に基づき試掘調査を実施した。その結果、計画地北半より土器片や遺構が検出されたため、市教委と市建設課と当該計画の今後の対応について協議し、埋蔵文化財の記録保存のため発掘調査を行うことで合意したため、後述する日程で発掘調査を行うに至った。

## 第2節 調査の方法と経過

### (1) 調査の方法

調査に際してはグリッド法を用い、調査予定地をカバーするように国家座標第VIII系に準拠して5mメッシュを基本とするグリッドを設定した。

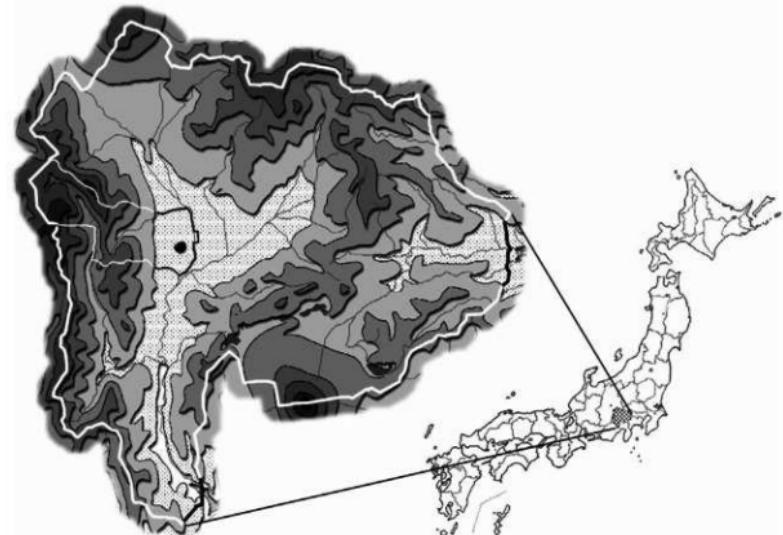
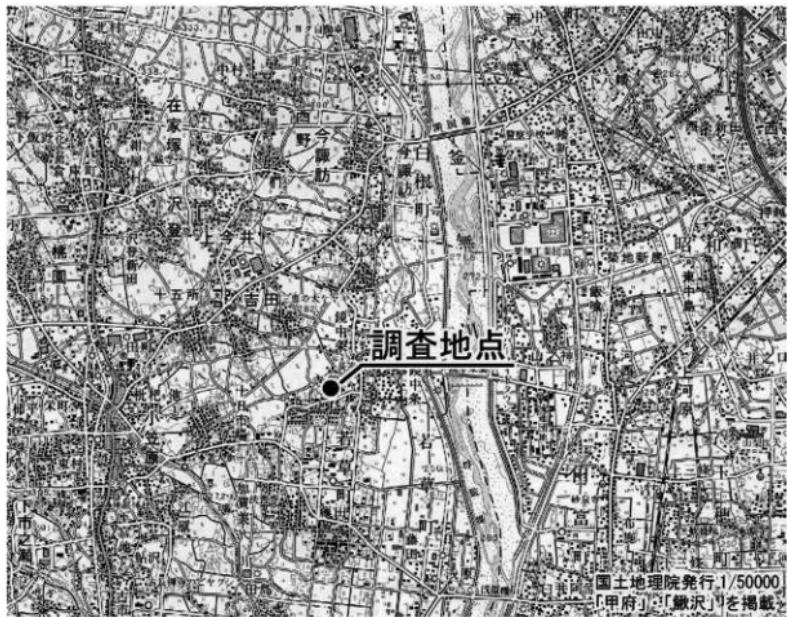
5mメッシュの各線(ライン)の名称は、南北に走る線を東から西にA・B・C・・・とアルファベットで、東西に走る線を北から南に1・2・3・・・と算用数字で表し、それぞれA-ライン、B-ライン、1-ライン、2-ラインなどと呼称した。またそれぞれのラインの交点を(西へ並ぶアルファベット) - (南へ並ぶ算用数字)のように表して、A-1ポイント、B-2ポイントなどと呼称した。各区(スクエア)の名称はその区画の北東隅の名称をもってあてた。

調査はまず重機により表土を除去しつつ、人力により確認面を精査して遺構確認作業を行った。表土から遺構確認面までの深さは概ね0.9～1.1m程度であった。

遺構の調査に際しては、適宜セクションベルトを設けながら覆土を除去した。セクションベルトは土層断面図を1/20で作成後取り除いた。遺構平面図は平板測量により、1/20で作成した。

土坑については覆土を二分割し、まず半分の覆土を除去した。その後、覆土の半裁によって生じた覆土断面の観察を行ない、土層断面図を1/10乃至1/20で作成した後完掘した。また、必要に応じてエレベーション図を1/20で作成した。平面図は平板測量によって1/20で作成した。正し、土層の観察、平面図の作成後に土層断面図・エレベーション図の作成を行わず、遺構の出土レベルを記録してこれに替えた場合もある。

遺構の全体測量に際しては、ラジコンヘリによる空中写真に拠ったが、上記のとおり細部については、平板測量により補完した。



第1図 遺跡の位置

## (2) 調査の経過

調査の経過は以下のとおりである。

- 6月22日（火）晴 機材搬入。重機により表土除去を行う。同時に確認面を精査し遺構確認作業を行う。
- 6月23日（水）晴時々曇 前日に引き続き表土の除去及び遺構の確認作業を行う。
- 6月24日（木）晴 午前中で表土の除去作業を終了する。同時に遺構確認作業終了。午後から遺構覆土の除去作業を開始する。SD01 の掘削を開始。SD01 覆土上層より雁又鏡が出土する。
- 6月25日（金）～6月27日（日）晴 雨天および休日により作業なし。
- 6月28日（月）晴 SD01 の掘削。
- 6月29日（火）晴 SD01 の掘削続行。SI01 の掘削開始。
- 6月30日（水）曇時々雨 SD01 の掘削。SI01 の掘削。
- 7月1日（木）晴～7月2日（金）晴 SD01 の掘削。
- 7月3日（土）晴～7月4日（日）晴 休日作業なし。
- 7月5日（月）曇 SD01 掘削。掘削面が下がってきたため、湧水により作業効率が低下する。SI01 の掘削。セクションベルトを残し覆土の除去を完了。SD06 の掘削およびその周辺の土坑群の掘削開始。
- 7月6日（火）晴 SD02 の掘削開始。SD02 以西の SD06 及び SD02 以西の土坑掘削完了。
- 7月7日（水）晴～7月8日（木）晴 SD02 の掘削。
- 7月9日（金）晴 SD02 の掘削。SD01 の掘削再開。
- 7月10日（土）晴のち雨～7月11日（日）晴 休日作業なし。
- 7月12日（月）曇 SD02 の掘削。
- 7月13日（火）晴 SD02 の掘削。SD01 の掘削。平行して SD01 の覆土断面図作成。
- 7月14日（水）晴 SD02 の掘削。SD02・SI01 の覆土断面図作成。セクションベルトの除去。
- 7月15日（木）晴 SD01・SD02 の掘削。
- 7月16日（金）晴 SD01・SD02 の掘削。
- 7月17日（土）晴～7月19日（月）晴 休日・祝日により作業なし。
- 7月20日（火）晴 甲府地方気象台気温 39.9 度を記録。SD01・SD02 の掘削。SD01 の掘削を完了。
- 7月21日（水）晴 SD02 の掘削。同遺跡第Ⅱ地点の基準点を用いて、グリッド設定。甲府地方気象台気温 40.4 度を記録。
- 7月22日（木）晴 SD03 掘削開始。
- 7月23日（金）晴 SD02 の掘削。SD03 の掘削。SD02 土層断面図作成。
- 7月24日（土）晴～7月26日（月）曇時々雨 休日および天候不良により休業。
- 7月27日（火）晴 SD02 の掘削。SD03 セクションベルトを残し掘削終了。SD07 掘削開始。
- 7月28日（水）晴 SD02・SD07 の掘削。
- 7月29日（木）曇時々雨 天候不良により野外作業なし。室内にて遺物整理作業を行う。
- 7月30日（金）曇 SD02 の掘削終了。SD07 の掘削終了。SD05 土層断面図の作成。セクションベルトの除去を行う。

7月31日（土）晴～8月1日（日）晴 休日作業なし。

8月2日（月）晴 本日より白根高校インターンシップ（職場体験）の高校生2名を受入れ（8月4日まで）。全体清掃開始。SD03周辺の平面図作成。

8月3日（火）晴後曇 全体清掃続行。S101・SD03写真撮影。

8月4日（水）晴後曇 全体清掃終了。土坑群平面図作成。SD01・SD02写真撮影。

8月5日（木）雨後晴 本日航空写真測量予定であったが、未明からの注意報発令されるほどの激しい雨により調査区水没。遺構の一部が崩れ撮影断念。天候の回復を待って午後から復旧作業を開始。同時にS101の平面図を作成する。

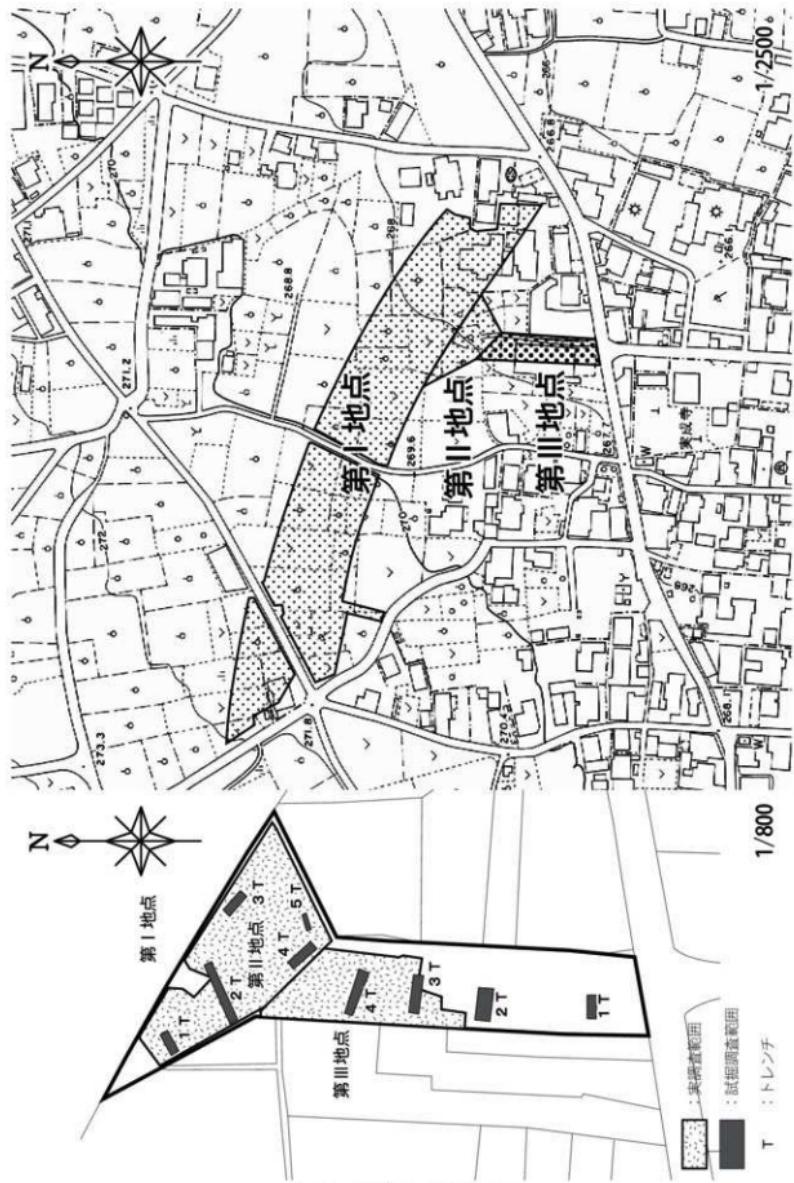
8月6日（金）晴 午前中全体清掃作業。午後より空中写真測量を開始する。撮影終了後調査区壁の土層断面図を作成し、全調査終了。

### （3）整理作業の経過と遺構番号の変更

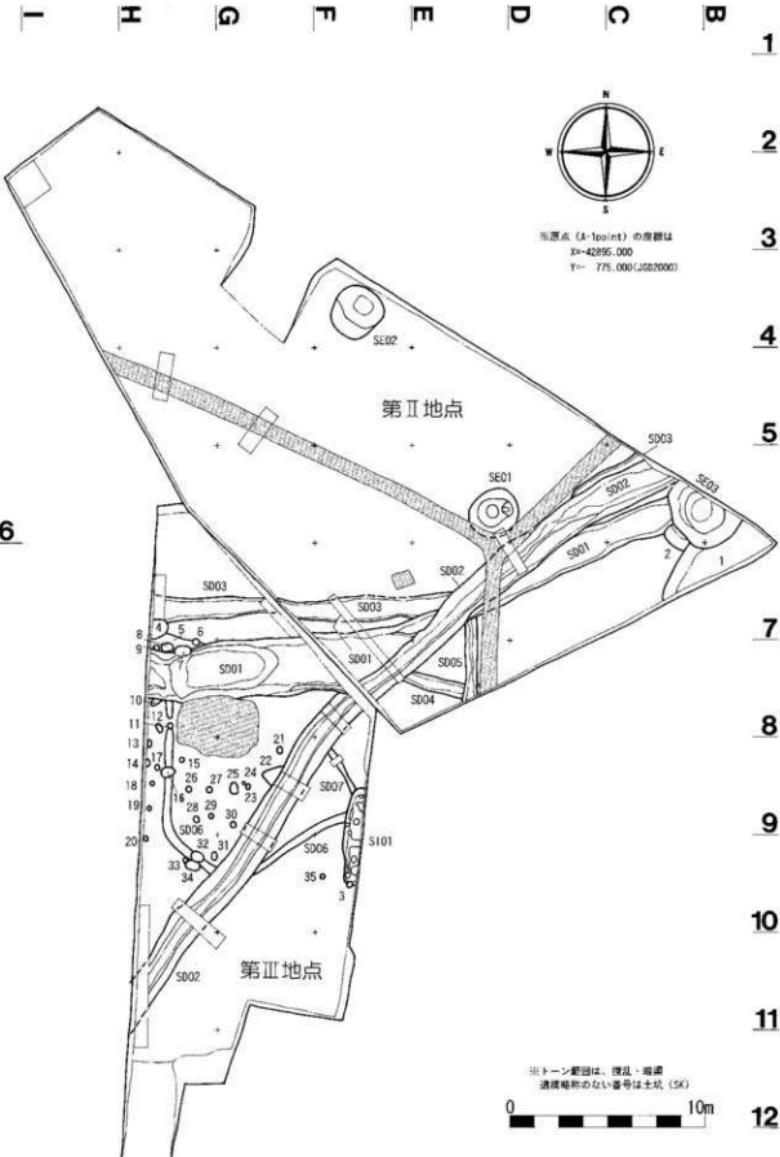
整理作業は、前年度末に調査を行った同遺跡第II地点と一括しておこなった。その際、本報告に際しては、隣接する2地点で遺構番号が共通であったほうがよいと判断し、下記のとおり調査時の遺構名称を変更した。なお、第III地点調査時のS D 0 4は欠番であり、「-」と記されたものは、調査時に遺構番号を付していないもの乃至はどちらかの調査地点に固有の遺構であるため他方に存在しないことを示している。なお、注記、実測等、報告書執筆直前の作業は調査時の遺構番号で為されている。

報告時	調査時		報告時	調査時	
	II地点	III地点		II地点	III地点
S101	-	S101	SK20	-	-
SE01	SE01	-	SK21	-	-
SE02	SE02	-	SK22	-	-
SE03	SK02	-	SK23	-	-
SK01	SK01	-	SK24	-	-
SK02	SK03	-	SK25	-	-
SK03	-	-	SK26	-	-
SK04	-	-	SK27	-	-
SK05	-	-	SK28	-	-
SK06	-	-	SK29	-	-
SK07	-	-	SK30	-	SKd
SK08	-	-	SK31	-	-
SK09	-	-	SK32	-	-
SK10	-	-	SK33	-	-
SK11	-	SKb	SK34	-	-
SK12	-	-	SK35	-	-
SK13	-	SKa	SD01	SD01	SD01
SK14	-	-	SD02	SD02	SD02
SK15	-	-	SD03	SD03	SD05
SK16	-	-	SD04	SD04	-
SK17	-	-	SD05	SD05	-
SK18	-	SKc	SD06	-	SD03
SK19	-	-	SD07	-	SD06

第1表 遺構名称新旧対照表



第2図 調査区の位置と配置



第3図 調査区全体測量図

## 第Ⅱ章 遺跡の立地と環境

### 第1節 遺跡の立地

本遺跡は、平成15年4月1日、山梨県の釜無川右岸地域6町村が合併して誕生した南アルプス市に立地する。市の総面積264.06平方km、領域は東西29.6km、南北11.8kmの範囲に広がり、山梨県の総面積の約5.9%を占める。市の領域は甲府盆地における釜無川（富士川）右岸地域のほぼ全てを占めるが、市の東端は釜無川（富士川）左岸に占地する市域の飛地部分であり、西端は、大仙丈ヶ岳（2975m）であり長野県に接する。市の北端は、駒津峰（2752m）付近で、南端は、釜無川に滻沢川、坪川等が合流する地点となる。

上記したように市の領域は甲府盆地における釜無川（富士川）右岸地域のほぼ全てを占めるが、これは、概ね山梨県の最西部、所謂峡西（きょうさい）地域、西郡（にしごおり）地方などと呼称されてきた地域に相当し、町村合併以前より地形的にも文化的にも一体的に捉えられてきた地域といえる。

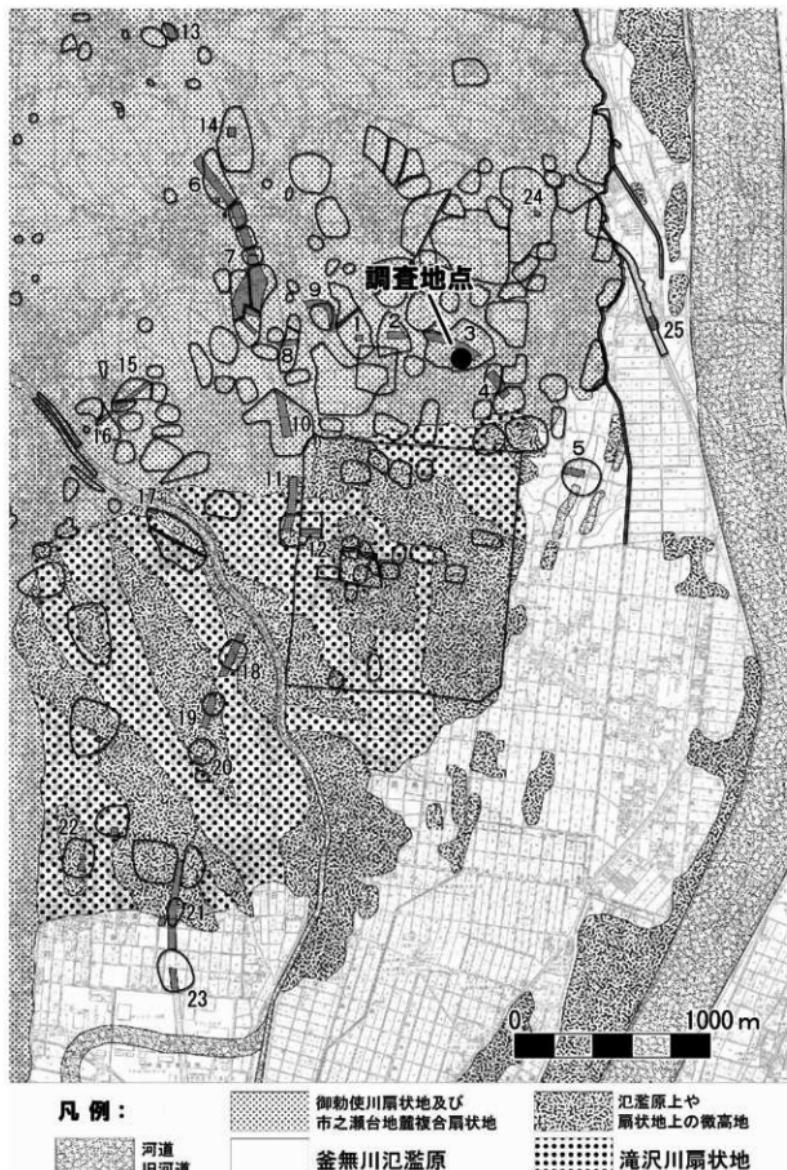
市域西部は、国内第2位の標高（3193m）を誇る南アルプス連峰（赤石山脈）の主峰北岳を擁し、その前衛である巨摩山地を含め急峻な山岳が卓越する。また、櫛形山を中心とした巨摩山地と南アルプス連峰との間には、所謂「糸魚川・静岡構造線」が市域を縦断する。

市域東半は、これら急峻な山岳を流下してきた河川の營為によって形成された複合扇状地が発達する。その中でも、御勅使川の河川作用によって形成された御勅使川扇状地は、日本有数の扇状地として著名である。市域の東辺は一部対岸に飛地を有するが、概ね釜無川に画され、これら巨摩山地由来の複合扇状地群が到達し得なかった市域南東辺には、釜無川の氾濫原がひろがっている。

寺部村附第6遺跡は、第4図に示すとおり、御勅使川扇状地上に古地する。御勅使川扇状地では、その扇端部分の湧水線に沿って帯状に埋蔵文化財包蔵地が分布することが知られている。これら御勅使川扇端遺跡群を見れば御勅使川扇状地の最末端においては、古墳時代後期・奈良平安時代を中心とする集落に伴って腰帶具などが検出された新居道下遺跡（10、以下遺跡名のあとに付した番号は第4図に示した遺跡の位置に対応する）、弥生時代中期・後期及び古墳時代後期～中世に係る遺構・遺物が検出された溝呂木道上第5遺跡（16）・枇杷B遺跡（15）、溝呂木道上第5遺跡から滻沢川を隔て南側に占地する向第1遺跡（17）などが発掘調査され、弥生時代中期以降中世まで、連綿と人間の營為の痕跡が検出され、扇状地末端部の湧水帯に支えられた豊かな住環境を想像することが出来る。

御勅使川扇状地扇端の範疇で捉えうる遺跡群でもやや内側（扇央）に入ると古墳時代前期及び平安時代の集落が発見された村前東A遺跡（7）・角力場第2遺跡（8）、寺部村附第12遺跡（2）などがあり、この辺りに古墳時代前期の遺構が濃密且つ広汎に分布することが明らかになりつつある。

またこの領域については、平安時代9世紀半ば以降、古墳時代前期以来断絶していた集落が再出現する傾向があり、例えば八ヶ岳山麓における平安時代前半の集落動向に見られるような該期の汎甲斐国的開墾指向の高揚といった潮流と期を一にした動向が見て取れるなど、前記領域とは様相が異なり、古墳時代前期および平安時代前半の遺跡が卓越する地域といえる。ここが、この地域でいうところの「田方」と「原方」の境界域にあたり、これより北側は、古来から「月夜でも焼ける」と称された御勅使川扇状



第4図 遺跡の立地と周辺の調査

地扁央の早魃地帯、所謂「原七郷（はらしちごう）」となる。

本遺跡は御勅使川扇状地上、扁端から約400～600m程扁央寄りに位置し、微視的に見れば、御勅使川扇状地扁端部の遺跡群の中でも内側（扁央）の分布領域範疇として捉えうる。この領域においては、今回検出された平安時代後半以降の遺構、遺物について、これまであまり検出例がなかったが、本遺跡と同様、現在の寺部集落に北接する寺部村附第12遺跡において若干の住居址、竪穴状遺構等が検出されているほか、今回寺部村附第6遺跡において、（第I～第III地点を通じて）一定の規模で該期の遺構が検出されたことにより、やはり通例いわれているとおり、時期が下るにつれて、遺構分布が現在の集落領域に近づく傾向がみてとれる。

本遺跡周辺を含む御勅使川扇状地末端部は、『和名抄』に所載の甲斐国巨麻郡九郷のうちの大井郷に比定される。御勅使川扇状地末端の湧水帶に位置する遺跡群の南面に広がる滝沢川扇状地上には条里地割が広く遺存し、12世紀代にはこの条里地域を中心に加賀美莊が成立して甲斐源氏加賀美氏が拠ったといわれる。滝沢川扇状地上の微高地に現在も占地する「法善寺」は、加賀美氏館跡と伝えられ、加賀美氏はここを拠点に峡西・峡南地方に勢力をもったとされる。滝沢川扇状地上では、法善寺の塔頭であった「福寿院」関連の遺構が検出された二本柳遺跡（11～12）が調査されている。二本柳遺跡では特に、甲西バイパス地点（11）から、古代末から近世の水田址などと共に、中世の木棺が良好な状況で検出され、当時の葬送儀礼を検証する上で貴重な事例となった。

遺跡の位置する南アルプス市寺部は、近世村落では寺部村にあたる。寺部村は、横地帳によれば慶長検地時点での石高525石6升、耕地面積は田3町余り、畠13町余り、荒地16町余りで、やはり扇央の早魃地帯に近いその立地から、畠地の割合及び荒地の割合が相対的に高いことが特徴とされる。本遺跡周辺も、現在は畠地灌漑設備の整備により果樹栽培が盛行するが、それ以前は専ら綿花、煙草、桑などの栽培が行われてきたものと推察される。

## 第2節 調査区の土層

遺跡の現況は桃畑であった。調査区において確認された基本土層は以下のとおりである。

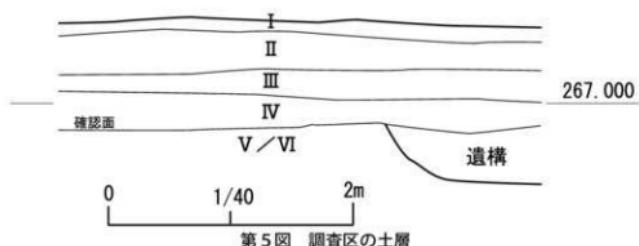
第I層 表土。灰褐色土。砂礫を多く含みしまらない。

第II層 褐色土。砂礫を多く含む。

第III層 黒褐色土。砂礫を多く含む。

第IV層 暗褐色土。砂礫を多く含む。本層下面が以降確認面となる。

第V／VI層 黄褐色粘土層（V）だが、調査区西側に行くほど、砂礫層（VI）が勝るようになる。



## 第Ⅲ章 検出された遺構と遺物

### 第1節 穴住居址 (S I)

#### S I O 1

E - 8・9区、調査区東壁沿いにおいて検出された。竈等の検出がなく、遺構の大部分が調査区外にあるため明確にしえないが、想定される平面形状から穴住居址とした。平面プランは、隅丸方形乃至隅丸長方形を呈するものと推察されるが、遺構の大部分が調査区外にあるため明確にしえない。S D O 6・O 7を切り、S K O 3と切り合う。検出し得た規模は南北 4.98 m、東西 0.95 m以上を測る。確認された深さは、調査区東壁において床面まで 0.29 m、床面の底面標高は 266.50 m～266.58 mで北に向かって若干の傾斜がみられる。

本址中央部には貼床が施され、貼床の厚さは最大で 0.06 mを測るが、床面には顯著な硬化面が見られない。また、この貼床を切って、遺構の中央付近を東西に走り、遺構を南北に二分すると見られる溝を有す。この溝の幅は 0.36 m程で床面から溝底面までの深さは最大で 0.09 mを測る。周壁の立ち上がりは、地山の砂礫質の土質に起因するためか緩やかで、特に本址北半にこの傾向が顯著である。周溝は、南半分は明瞭に確認できるが北半では不明瞭なものとなる。検出された周溝の幅は、0.17～0.18 m程で、床面からの深さは最大で 0.10 mを測る。また床面においては、6基のピット (P - 1～7) を検出した。各ピットの概要は第2表のとおりである。また、西壁中央よりやや北半において、幅 0.20 mにわたって周壁の一部が抉られたような形状を観察することができる。

遺物は、貼床内の遺構を南北に画するとみられる溝内から、土師質土器の完形の皿が 2点 (1・2) 検出されたほか、覆土から土師質土器の皿 (3) が 1点、鉄製品片 1点 (4) が検出された。

#### 第2節 溝 (S D)

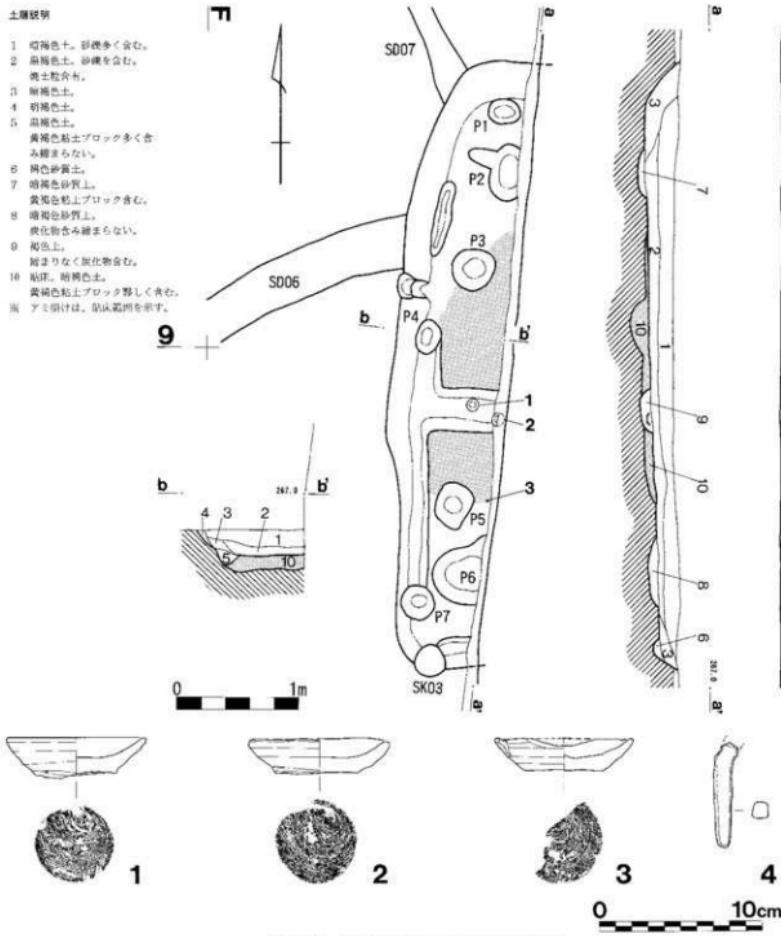
#### S D O 1

G - 7・H - 7区において検出された。主軸は、調査区内においては、概ね東西方向に直線的に調査区を横断する。両端は調査区外にあり東側は同遺跡第II地点に続く。S D O 2、S K O 5、S K 1 0を切り、S K O 7、S K O 9と切り合う。遺構確認面において検出された幅は 2.88～3.46 m、深さは 0.40～0.86 mで、グリッド G - line 付近ですり鉢状に深くなる。断面形は概ね U文字状を呈し、調査区東側では底面に平坦面を有する。底面標高は、調査区西端において 266.53 m、一時的に深くなる c-c' 断面において 265.92 m、調査区東端において 266.35 mを測る。覆土は、黒褐色土を主体とする自然堆積である。

遺物は、覆土から土師質土器片、陶器片、鉄製品が若干検出されたが、いずれも小片で土師質土器 4点、鉄製品 1点のみしか図示し得なかった (1～5)。

#### S D O 2

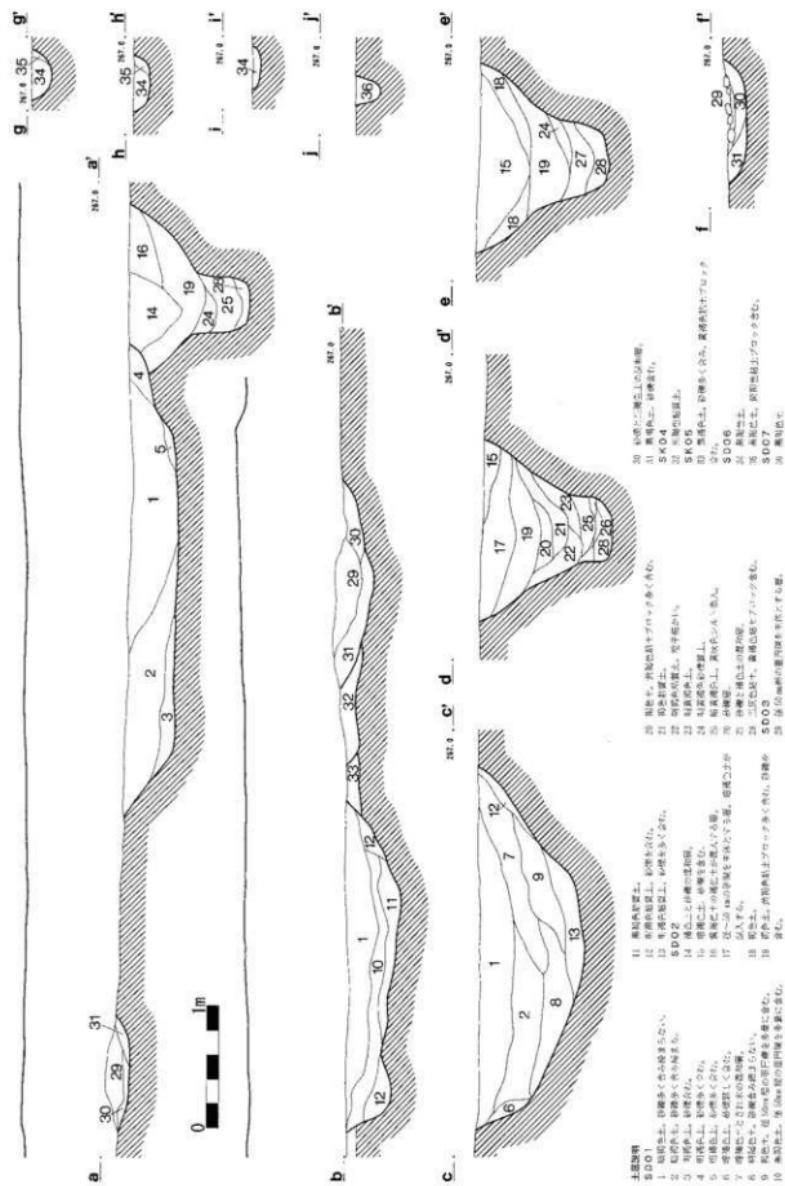
主軸は、やや蛇行するが調査区内で検出された範囲では、概ね N - 35° - E を採り調査区を縦断する。両端は調査区外にあり北側は同遺跡第II地点に続く。S D O 1に切られ、S D O 6、S D O 7、S K 2 2を切る。遺構確認面において検出された幅 1.30～1.76 m、深さは 1.10 m程を測る。断面形は下



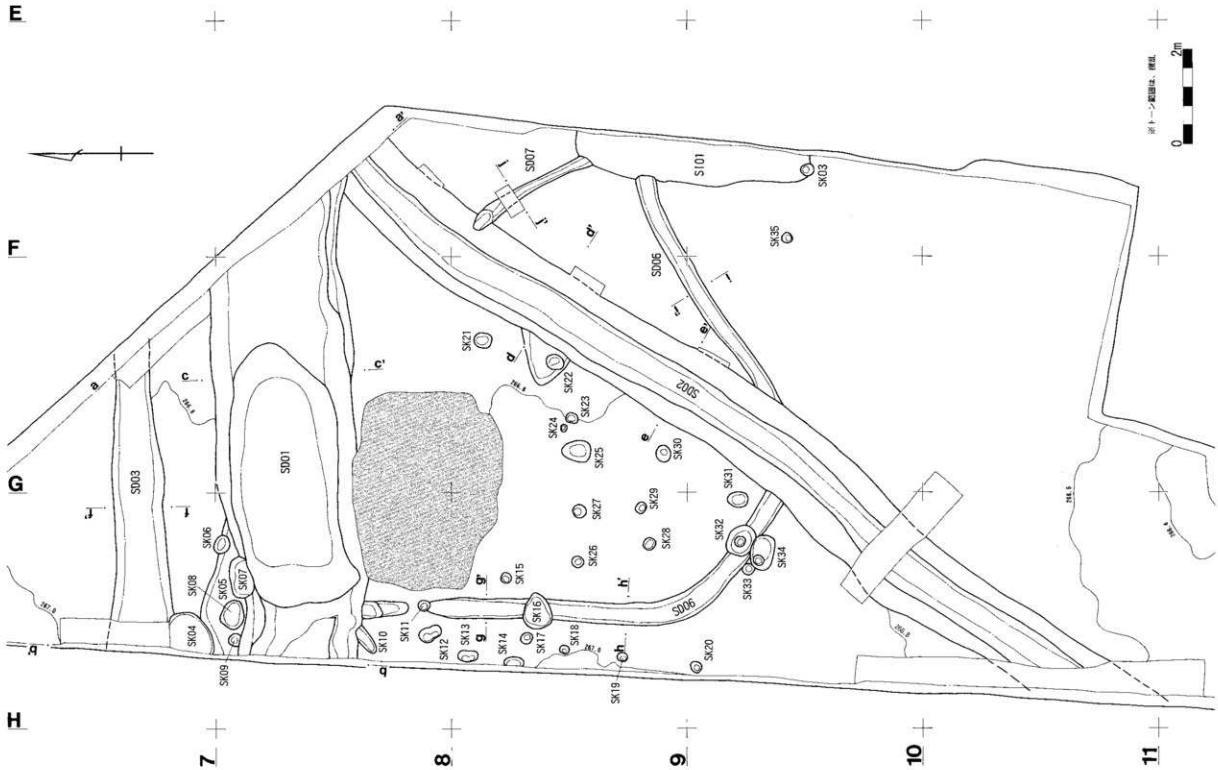
第6図 S101測量図及び出土遺物

遺構番号	形状	長径	短径	床面からの 深さ	底面標高	備考
P-1	楕円形	0.26	0.20	0.03	266.426	
P-2	-	-	-	0.05	266.406	一部調査区外
P-3	円形	0.38	0.36	0.11	266.370	
P-4	楕円形	0.29	0.20	0.07	266.404	
P-5	楕円形	0.31	0.36	0.24	266.362	
P-6	-	-	-	0.08	266.484	一部調査区外
P-7	円形	0.29	0.28	0.14	266.462	

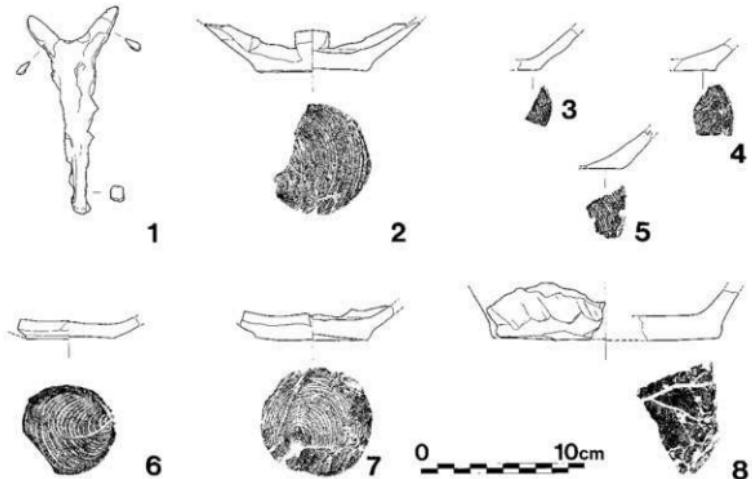
第2表 S101ピット計測表



第7図 溝・土坑断面図



第8図 溝・土坑平面図



第9図 溝出土遺物

半はやや丸みを帯びたコの字状、上半は崩落によるためか、緩い擂鉢状を呈す。底面標高は、調査区北端において 266.78 m、d-d' 断面において 265.69 m、e-e' 断面において 265.57 m となり今回の調査区内に限れば南側に向かって若干の傾斜が看取される。覆土は褐色土を主体とする自然堆積で、底面付近は粘質土と礫の混和層が堆積する。

遺物は覆土から土師質土器片、陶器片が若干検出されたが、いずれも小片で土師質土器 2 点のみしか図示し得なかった（6・7）。

### S D O 3

G-6・H-6 区において検出された。主軸は、S D O 1 にほぼ平行し、概ね東西方向に直線的に調査区を横断する。両端は調査区外にあり東側は同遺跡第Ⅱ地点に続く。S K O 4 を切る。遺構確認面において検出された幅は 0.74 ~ 1.36 m、深さは 0.17 ~ 0.27 m。断面形は U 文字状を呈し底面標高は調査区西端で 266.75 m、f-f' 断面において 266.70 m、東端で 266.75 m を測る。覆土は、黒褐色粘質土と拳大の亜円礫の混和層に占められる。特に覆土上面に径 0.05 m 程の亜円礫に占められる層を有する。遺物は、覆土から土師質土器片が若干検出されたが、小片のため図示し得なかった。

### S D O 6

調査区中央付近で検出され、調査区内で U 字状に湾曲する。S I O 1、S D O 2、S K 1 6・3 2・3 4 に切られ、S K 1 1 と切りあう。幅は概ね 0.40 m で一定、断面は U 字状を呈し、検出された深さは概ね 0.10 m 程度、底面標高は g-g' 断面において 266.80 m、h-h' 断面において 266.80 m、F-9 区で S D O 2 に切られる東側で 266.70 m、S I O 1 に切られる直前で 266.61 m を測る。覆土は黒褐色土を主体とするが、壁面近くでは、黒褐色土と地山の黄褐色土との混和層が観察される。

遺物は、覆土から土師質土器片が若干検出されたが、小片のため図示し得なかった。

### S D O 7

E-8区において検出された。S I O 1、S D O 2に切られる。覆土の質などから、本址はS D O 6につながる可能性もある。主軸は、調査区内で検出された範囲では、概ねN-27°-Wを探る。検出された幅は0.19~0.35mを測る。断面はU文字状を呈し、検出された深さは概ね0.20m、jj'断面における底面標高は266.50mを測る。S D O 2に切られる付近では、段を持って深くなり、この部分の確認面からの深さは0.34m、底面標高は266.36mを測る。覆土は黒褐色土に占められる。

遺物は覆土から甕形土器と思しき1点が検出された(8)。

### 第3節 土坑(SK)

本遺跡第II・III地点では、土坑を35基、本調査区(III区)においては、土坑33基を検出した。その概要については、第4表にまとめた。本調査区で確認された土坑の規模はいずれも0.17~0.75m程で、相対的に小規模なものが主体となる。調査区が限定された範囲であったこともあり、掘立柱建物址等遺構を想定し得る配列はみいだせなかつた。

遺物は、SK11・13・18・30からそれぞれ若干の土師質土器片が検出されたが、小片のため、時期の判別、図示はできなかつた。

場所番号	遺物番号	種別	器形	計測値			残存率	色調	胎土	焼成	調整等	備考/出土位置等
				口径	底径	器高						
第6区	1	土器	皿	8.3	4.8	2.5	完存	鈍い黄橙色	緻密、金色、青色多含。	硬質	口クロ成形 底部回転系切未調整	S I O 1
	2	土器	皿	8.0	5.0	2.2	完存	橙色	緻密、金色、青色多含。	硬質	口クロ成形 底部回転系切未調整	S I O 1
	3	土器	皿	(8.4)	(4.8)	(2.0)	全体の1/2	橙色	緻密、金色、青色多含。	硬質	口クロ成形 底部回転系切未調整	S I O 1
	4	鉄製品	不明	L6.5	W1.1	D1.0	不明					S I O 1
第9区	1	鉄製品	盤	L12.6	W5.6	D0.8	完存					S D O 1
	2	土器	皿か	—	(6.4)	(3.0)	体～底部3/4	赤褐色	緻密、金色、青色多含。	硬質	口クロ成形 底部回転系切未調整	S D O 1
	3	土器	皿か	—	—	(2.6)	破片	灰褐色	緻密、金色、青色多含。	硬質	口クロ成形 底部回転系切未調整	S D O 1
	4	土器	皿か	—	—	(1.5)	破片	橙色	緻密、金色、青色多含。	硬質	口クロ成形 底部回転系切未調整	S D O 1
	5	土器	皿か	—	—	(2.3)	破片	橙色	緻密、金色、青色多含。	硬質	口クロ成形 底部回転系切未調整	S D O 1
	6	土器	皿か	—	5.3	(1.3)	底部完存	鈍い褐色	緻密、金色、青色多含。	硬質	口クロ成形 底部回転系切未調整	S D O 2
	7	土器	皿か	—	6.9	(2.1)	底部完存	黒褐色	緻密、金色、青色多含。	硬質	口クロ成形 底部回転系切未調整	S D O 2
	8	土器	甕	—	(13.8)	(3.5)	破片	褐色	粗。小孔を多く含む。	やや軟質	外面縦方向に顯著なタテナデ痕。内面不整方向ナデ。底部木葉痕	S D O 7

第3表 出土遺物観察表

遺構番号	位置(区)	形状	長径	短径	深さ	底面標高	切り合い／備考
SK 0 1	第II地点						欠番。同遺跡第II地点に所在。
SK 0 2	第II地点						欠番。同遺跡第II地点に所在。
SK 0 3	E - 9	円形	0.28	0.27	0.20	266.50	SD 0 1と切り合う。
SK 0 4	G - 6	-	-	-	0.05	266.85	一部調査区外。SK 0 5を切り、SD 0 3に切られる。
SK 0 5	G - 7	-	-	-	0.30	266.60	一部調査区外。SK 0 5を切り、SD 0 1・SK 0 4に切られ、SK 0 6～0 9と切り合う。
SK 0 6	G - 7	-	0.40	0.34	0.16	266.74	SK 0 5に切られる。
SK 0 7	G - 7	橢円形？	0.89	-	0.35	266.55	SD 0 1・SK 0 5と切りあう。
SK 0 8	G - 7	橢円形	0.64	0.52	0.16	266.74	SK 0 5と切りあう。
SK 0 9	G - 7	円形？	0.29	-	0.16	266.74	SD 0 1・SK 0 5と切りあう。
SK 1 0	G - 7	橢円形？	-	-	0.13	266.77	SD 0 1に切られる。
SK 1 1	G - 7	円形	0.24	0.24	0.22	266.68	SD 0 6と切り合う。
SK 1 2	G - 7	不整橢円形	0.49	0.32	0.27	266.63	
SK 1 3	G - 8	不整橢円形	0.40	0.21	0.21	266.74	
SK 1 4	G - 8	橢円形？	0.40	-	0.06	266.89	一部調査区外。
SK 1 5	G - 8	円形	0.21	0.20	0.20	266.75	
SK 1 6	G - 8	不整円形	0.69	0.62	0.09	266.86	SD 0 6を切る。
SK 1 7	G - 8	円形	0.26	0.24	0.15	266.80	遺構内に拳太の礪。
SK 1 8	G - 8	橢円形	0.21	0.19	0.12	266.83	底面に0.40×0.30のピットあり。SD 0 2に切られる。
SK 1 9	G - 8	橢円形	0.23	0.20	0.14	266.81	
SK 2 0	G - 9	橢円形	0.26	0.23	0.19	266.81	
SK 2 1	F - 8	橢円形	0.40	0.30	0.10	266.65	
SK 2 2	F - 8	-	-	-	0.14	266.63	
SK 2 3	F - 8	橢円形	0.28	0.21	0.26	266.54	
SK 2 4	F - 8	橢円形	0.17	0.14	0.06	266.74	
SK 2 5	F - 8	橢円形	0.63	0.47	0.21	266.59	
SK 2 6	G - 8	円形	0.27	0.26	0.20	266.70	
SK 2 7	G - 8	円形	0.29	0.27	0.30	266.60	
SK 2 8	G - 8	橢円形	0.28	0.24	0.09	266.81	
SK 2 9	G - 8	橢円形	0.26	0.21	0.20	266.70	
SK 3 0	F - 8	円形	0.34	0.31	0.19	266.66	
SK 3 1	G - 9	橢円形	0.43	0.33	0.10	266.80	
SK 3 2	G - 9	橢円形	0.66	-	0.17	266.73	SD 0 6を切り、SK 3 4と切り合う。底面に0.26×0.22のピットあり。
SK 3 3	G - 9	円形	0.25	0.24	0.07	266.83	
SK 3 4	G - 9	橢円形	0.75	0.51	0.20	266.70	SD 0 6を切り、SK 3 2と切り合う。底面に0.25×0.22のピットあり。
SK 3 5	E - 9	円形	0.22	0.22	0.17	266.56	

第4表 土坑計測表

## 第IV章 総括

今回の調査区および今回の調査区に北接する同遺跡第II地点からは、第II地点 275.6 m<sup>2</sup>、第III地点 507.0 m<sup>2</sup>、併せて 782.6 m<sup>2</sup>の調査面積から、堅穴住居址 1軒、複雑に切りあう溝 7 条、井戸址 3 基、土坑 35 基を検出した。

調査においては、遺構の切り合い関係と各々の遺構のプランの確認（切り分け）に苦慮し、検出過程で各遺構ごとの遺物を分離し難かったこと、また各遺構に相対的に幅広い時期の遺物が混入すること、また押しなべて小片で数も少なく、溝や井戸といった遺構の性格からも遺構の時期決定には非常に苦慮した。

この中で第II調査区において検出された S K 0 1 については、唯一弥生時代後期～古墳時代前期の所産といえる。第II章にも記載したとおり、御勅使川扇状地末端で行われた発掘調査については、そのほとんどの遺跡において該期の遺構・遺物が検出されており、御勅使川扇状地末端部における該期の遺跡の非常に広範な分布が改めて確認できることになる。

これ以外の遺構については、概ね平安時代後半から中世（11～15世紀）の範疇で捉えることができる。遺構の時期については、第III地点で検出された S I 0 1 については、床面を画する溝状の遺構から検出された土師質土器皿から 11世紀後半の所産とることができる。また第II調査区から検出された井戸址のうち、S E 0 1、S E 0 2 については、S E 0 1 の覆土中から検出された所謂柱状高台杯、S E 0 2 から検出された渥美の所産となる甕から、いずれも 12世紀後半～13世紀頃の所産である可能性が高い。この他の溝、土坑等については、出土遺物が乏しく、また広汎な時期の遺物が混入しており時期を絞りがたい。

御勅使川扇状地末端部においては、平安時代後半以降の遺構・遺物については、これまでほとんど、検出例が得られていないかったが、本遺跡の西側に位置する寺部村附第11・12遺跡において平安時代後半期の遺構・遺物が検出され、現在の寺部集落の北端に位置する本遺跡（第I～第III地点を通じて）において一定の規模で該期の遺構が検出されたことにより、微視的にみれば、やはり通例いわれているとおり、時期が下るにつれて、遺構分布が現在の集落領域に近づく傾向が看守され、近世村落寺部村の成立を考える上で有意義な発見となった。

また、今回検出された人間の骨為の痕跡については、井戸や用途として用水路の可能性のある溝など安定的に定住するに欠くことのできない「水」にまつわる遺構が検出された。今回の調査区に近接して、または内包して人間の安定的に定住した生活があったことを傍証するものとすることができよう。

近世において寺部村は、検地帳によれば慶長検地時点での石高 525 石 6 升、耕地面積は田 3 町余り、畠 13 町余り、荒地 16 町余りで、やはり扇央の旱魃地帯に近いその立地から、畠地の割合及び荒地の割合が相対的に高いことが特徴といえる。今回の調査地点から扇状地末端の湧水線までの距離は約 800 m 程あり、相対的に水に乏しい地域にありながら、反面扇端も近くなってきており地下水位がある程度高くなっている。井戸は比較的容易に構築することができ、且つ逆に湧水線までは若干の距離があるため、井戸はここに暮らす人々の利便性を大きく高める施設として機能していたことが伺える。

## 参考引用文献

- 小林健二ほか 1997 「大師東丹保遺跡Ⅱ・Ⅲ区」『山梨県埋蔵文化財センター調査報告書』第132集
- 小林健二ほか 2000 「石橋北屋敷遺跡」『山梨県埋蔵文化財センター調査報告書』第178集
- 斎藤秀樹 2003 「六科・村北遺跡」『八田村文化財報告書』第7集
- 清水 博 1998 「枇杷B遺跡」『柳形町文化財調査報告書』第17集
- 田中大輔 1998a 「角力場第2遺跡」『若草町埋蔵文化財調査報告書』第1集
- 田中大輔 1998b 「溝呂木道上第5遺跡」『若草町埋蔵文化財調査報告書』第2集
- 田中大輔 2001 「寺部村附第12遺跡」『山梨考古』第76号 山梨県考古学協会
- 田中大輔 2002 「向第1遺跡」『若草町埋蔵文化財調査報告書』第3集
- 田中大輔 2003 「溝呂木道上第5遺跡（第Ⅱ地点）」『若草町埋蔵文化財調査報告書』第4集
- 田中大輔 2005 「寺部村附第6遺跡（第Ⅱ地点）」『南アルプス市埋蔵文化財調査報告書』第5集
- 中山誠二 2000 「二本柳遺跡」『山梨県埋蔵文化財センター調査報告書』第183集
- 新津 健ほか 1981 「住吉遺跡」 甲西町教育委員会 地土史談本第1集
- 新津 健ほか 1990 「大輪寺東遺跡」『山梨県埋蔵文化財センター調査報告書』第53集
- 新津 健ほか 1992 「二本柳遺跡」『山梨県埋蔵文化財センター調査報告書』第72集
- 降矢哲男・佐々木満・山下孝司 2001 「山梨県における中世の土器様相について—土師器皿を中心にして—」『中世土器研究論集—中世土器研究会20周年記念論集—』
- 三田村美彦他 1999 「村前東A遺跡」『山梨県埋蔵文化財センター調査報告書』第157集
- 宮沢公雄 2004 「寺部村附第6遺跡」『南アルプス市埋蔵文化財調査報告書』第2集
- 山下大輔ほか 2000 「前原G遺跡」『柳形町文化財調査報告書』第19集 柳形町教育委員会
- 山下孝司・瀬田正明 1999 「奈良・平安時代の編年」『山梨県史』資料編2 山梨県
- 米田明訓 1998 「新居下遺跡」『山梨県埋蔵文化財センター調査報告書』第147集
- 米田明訓他 1999 「十五所遺跡」『山梨県埋蔵文化財センター調査報告書』第158集
- 若草町 1990 『若草町誌』





調査区全景(南より)

図版 2



調査区全景



S I O 1 (南より)



S D O 1 (東より)

図版 4



S D O 2 (南より)



S D O 3 (東より)

図版 5



S I O 1 出土遺物 (1)



S I O 1 出土遺物 (2)



S D O 1 出土遺物

## 報 告 書 抄 錄

ふりがな	てらべむらつきだい6いせきだい3ちてん
書名	寺部村附第6遺跡第Ⅲ地点
副書名	市道若草1級1号線道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ	南アルプス市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第6集
編著者	田中大輔
編集機関	南アルプス市教育委員会
所在地	〒400-0492 山梨県南アルプス市鮎沢 1212 TEL055-282-7777
発行年月日	西暦2005年3月15日

ふりがな	てらべむらつきだい6いせきだい3ちてん
所収遺跡	寺部村附第6遺跡第Ⅲ地点
ふりがな	やまなしけんみなみあるぶすしてらべ1924-7ばんちほか
所在地	山梨県南アルプス市寺部 1924-7番地外
コード	市町村 19208
	遺跡 WK-31 (南アルプス市遺跡番号) / 41031(旧若草町遺跡番号)
1/25000地図名	小笠原
経緯度	北緯 35° 36' 47" (JGD2000) 東経 138° 29' 28" (JGD2000)
標高	267 m
調査期間	20040622 ~ 20040806
調査面積	275.6 m <sup>2</sup>
調査原因	道路建設
種別	散布地
主な時代	平安時代後半・中世
主な遺構	堅穴住居址・溝・土坑
主な遺物	土師器・土師質土器・鉄製品等
特記事項	

南アルプス市埋蔵文化財調査報告書第6集  
**寺部村附第6遺跡第Ⅲ地点**

市道若草1級1号線道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2005年3月15日発行

編集発行 南アルプス市教育委員会  
〒400-0492 山梨県南アルプス市鮎沢1212  
電話 055-282-7777

印 刷 ほおづき書籍株式会社  
〒381-0012 長野県長野市柳原2133-5  
電話 026-244-0235